

“にゃんこさん” の子育て

息子が0歳のころは、近所に同年代の子どもがたくさんいたおかげで、親同士のつながりもあり、また、町の子育て支援センターも利用していたので、子育ては「孤独」ではありませんでした。息子が1歳ころ、仕事復帰をするタイミングで保育所の利用を開始しました。この頃、夫は仕事で家を留守にすることが多く、また私の通勤が片道40分以上かかっていたので、仕事と育児の両立がとにかく大変でした。

子どもの発達のごことは、初めは気にならなかったのですが、2歳のときに親子で参加したイベントで、他のどの子よりもよく動くことに気づき、周囲に相談するようになりました。このころは夜なかなか寝てくれなくて、親も寝不足でイライラしていました。つい大きな声を出してしまうこともありましたね。自分の時間など全く無く、ストレスがたまっていて、“いっばいっばい”だったのだと思います。誰かに助けてほしいと思い、町の保健師さんに相談したところ、発達の検査を受けることを提案されました。そのときは「頼るところができた」とほっとしたのを覚えています。検査を受けることに対して、周囲からは「(子どもを)障がい児にしたいの?」と言われ、理解してもらえないと感じることもありました。

検査を受けて、発達支援センターに通うことになりましたが、通勤に時間がかかるため、通う時間を作るのが大変でした。3歳ごろになると、苦手な音があることが分かり、特に突然鳴る音が苦手だったので、家電のお知らせ機能や自動運転機能はすべて切っていました。いろいろな経験を積ませたいと思い、きょうだいと一緒に出掛けることがありましたが、刺激に反応してきょうだい2人で大声を出すことがあるので、図書館など静かな場所には連れていけませんでした。体験教室に行ったときに先生から「静かにして!」と注意されたときには落ち込みましたね。うるさくても許される場所や子どもの特性を理解してくれる人のところに行くのは安心でした。小学校入学までは、とにかく“がむしゃら”に子育てをしていましたね。

小学校入学に当たっては、本人の特性を理解してほしいと思い、「我が子の説明書」をプリントにして、先生やクラスの保護者に渡しました。最初は、色々なことができるようになってほしい、他の子に早く追いついてほしいという親の願いから、「いつまでに〇〇ができるように・・・」と自分の中で目標を作っていました。

クラスの子とのトラブルが目立つようになってきたのは2年生のころからです。泣き声が苦手で、泣いている子の口をふさごうとしたり、強引に部屋を出ていこうとすることがありました。親としては落ち込んだり、眠れなくなることもありましたね。この頃から、“他の子と同じ”を目指すのではなく、「本人の特性は変えられない。興味のあることを伸ばしてあげよう」と考えるようになり、本人が興味を示す場所に連れていくようになりました。4年生になると、学校に行き渋るようになったので、学校以外で過ごす場所を探しました。学

校以外にも目を向けるようになると、学校だけが学びの場ではないと思えるようになり、私自身気持ちが楽になりました。学校生活に不安を訴えることもあったので、先生に相談して個別対応を増やしてもらいました。

高学年になった時には、先生方の支援もあり、学校生活は順調で、クラスの中に居やすくなりました。歴史に興味を持つようになり、学校生活の中で楽しいことが増えていきました。家では親子の会話が楽しくなってきましたね。低学年の頃は、「子どもを自立させなきゃ」と親自身が頑張っていました。高学年になると、「一緒に楽しみを見つけよう」「この子にあった学びを見つけよう」と考え方を切り替えるようになりました。

小学校高学年のころの子育ては、家族で一緒に楽しみを見つける時間でした。

